

「異文化理解」（2年生）

木村政子
土方伸子（文責）

1. はじめに

今年度は、タイからの留学生1名を含め、15名の生徒で週1時間の授業を行った。短い授業時間、2年生になって初めて初めてこの授業を履修する生徒たちという条件は、昨年度の生徒たちと同じであった。

昨年度の反省として、授業内容が盛り沢山で、まとめや生徒が理解を深める時間を十分に確保することができなかった、1年生で基礎的な知識の積み上げがない生徒たちに対して、進度を調整する配慮に欠けていたなどがあった。（本稿紀要48号参照）

したがって、今年度は、年間計画にこだわり過ぎず、生徒たちの様子を見つつ、必要に応じて理解を深めるディスカッションの時間を確保するなど、柔軟な授業展開を心がけながら実践を行った。

2. 年間授業計画および実践内容の比較

<1学期授業計画>

| 授業計画 | | |
|---------|----|--|
| 回 | 月日 | |
| 1学 期 | 1 | 4月11日 授業内容概略説明、生徒自己紹介、グループを分け、(留学生へのインタビュー (英語+日本語)) |
| | 2 | 18日 <School班> 留学生へのインタビュー (英語+日本語) &まとめ (全員) |
| | 3 | <Daily life班> 留学生へのインタビュー (英語+日本語) &まとめ (全員) |
| | 4 | 5月2日 留学生・外国人生徒による日本人生徒への質問、次週 (各国の遊び) 予告&グループ分け (3班) |
| | 5 | 16日 各国の遊び、食文化準備 (各遊びと同じグループで、英語・日本語のレシピを作成) |
| | 6 | 30日 國際協力事業団、青年海外協力隊、MTG (MTG発行の記事を眺める)、夏休みのレポートについての説明 |
| | 7 | 6月6日 食文化 (中国、タイ、日本) に触れる～その1～ (調理実習) |
| | 8 | 13日 鷹野校長お話「初海外旅行 (イラン) で見て・聞いて・味わって・感じたこと」 |
| | 9 | 20日 青年海外協力隊OGのお話「マラウイで見て・聞いて・味わって・感じたくえつ、変! 何これ違う?」 |
| | 10 | 27日 VIDEO「豚の解体」、夏休みレポートテーマ決定 宿題: ブータンに送る10項目アンケート&手紙 |
| | 11 | 7月4日 ブータンと日本の10項目アンケートを比較 |
| | 12 | 11日 VIDEO「地球家族: ブータン王国 (20分)」 |
| 夏休み | | 課題: 「えっ、変! 何これ違う?????と思ったことを実際に体験して」 |

<1学期実践内容>

| | 回 | 月 日 | 実 践 内 容 |
|-------------|----|--------------------------------------|--|
| 1 学 期 | 1 | 4月11日 | 授業内容概略説明、生徒自己紹介、グループを分け、(留学生へのインタビュー (英語+日本語)) |
| | 2 | 18日 | <School班> 留学生へのインタビュー (英語+日本語) &まとめ (全員) |
| | 3 | 25日 | <Daily life班> 留学生へのインタビュー (英語+日本語) &まとめ (全員) |
| | 4 | 5月2日 | 留学生・外国人生徒による日本人生徒への質問、次週 (各國の遊び) 予告&グループ分け (3班) |
| | 5 | 16日 | 各国の遊び、食文化準備 (各國の遊びと同じグループで、英語・日本語のレシピを作成) |
| | 6 | 30日 | 国際協力事業団、青年海外協力隊、MTG (MTG発行の記事を眺める)、夏休みのレポートについての説明 |
| | 7 | 6月6日 | 食文化 (中国、タイ、日本) に触れる~その1~ (調理実習) |
| | 8 | 13日 | 鷹野校長お話「初海外旅行 (イラン) で見て・聞いて・味わって・感じたこと」 協力隊員に初メール送る |
| | 9 | 20日 | 青年海外協力隊OGのお話「マラウイで見て・聞いて・味わって・感じたくえっ、変! 何これ違う?」 |
| | 10 | 27日 | 20日の話についてのディスカッション I 宿題: ブータンに送る10項目のアンケート&手紙を書いてくる |
| | 11 | 7月4日 | 20日の話についてのディスカッション II |
| | 12 | 11日 | 夏休みレポートについて、ブータンの高校生の自己紹介文配布、前回までのディスカッションの感想文回収 |
| 夏 休 み | | 課題: 「えっ、変! 何これ違う?????と思ったことを実際に体験して」 | |

※ [] は、授業計画を変更した箇所である。

○青年海外協力隊OGの講演について

1学期前半は、日本語がまだ十分に理解できない留学生も授業に参加しやすいように、留学生を囲んでのインタビューや各国の遊び、食文化などを行った。1学期後半、当初の予定では、日頃身近に感じていない国々や様々な違いといったものに目を向けるよう、導入的な内容として、青年海外協力隊OGの講演、ブータン王国についてのVIDEO視聴などを計画していた。しかし、この青年海外協力隊OGの講演というのが、あまりにも飾らない、現実をありのままに伝える内容であったため、生徒たちは、理想と現実のギャップに大きなショックを受けることになった。講演後、明らかに生徒たちの頭は混乱していた。したがって、翌週からの授業内容を変更し、頭を整理させるためにもディスカッションを行うことにした。生徒たちは、感じたことや疑問に思ったことなどを自由に発言した。仲間の発言に対し別の角度から意見を述べる生徒が出てきて、予想以上に活発な議論が展開された。仲間の意見を聞く中で、自分の考えを揺さぶられたり、新たな物の見方をするようになったりした生徒もいた。初めて生徒たちの口から、「国際協力ってなに?」「異文化理解ってなに?」という言葉が出始めた。(資料1参照)

<2学期授業計画>

| | 回 | 月 日 | 授 業 計 画 |
|-------------|----|-------|--|
| 2 学 期 | 1 | 9月5日 | 夏休みレポートブリーフプレゼンテーション、9月8日ガーナ高校生来日交流会準備、MLCの現状報告 協力隊員とのメール交換の進度確認←(冬休みの課題レポート頭出し<メール対策のすすめ>) |
| | | | 9月8日(月) 16:00~19:00 ガーナ高校生来日交流会 |
| | 2 | 12日 | 3ヶ国の比較Ⅰ ・3ヶ国のアンケート集計(班別で付箋貼り) ・班別で違いをディスカッション&発表 |
| | 3 | 19日 | 3ヶ国の比較Ⅱ ・3ヶ国比較プリントを読み、共通点や相違点についてなぜ?をディスカッション |
| | 4 | 10月3日 | 体験してみようⅠ |
| | 5 | 17日 | 体験してみようⅡ OR 冬休みレポート内容について、班別でこれまでのメール交換内容について情報交換 |
| | 6 | 31日 | テーマの調整&決定とそれに基づく調べ学習(コンピューター使用可) |
| | 7 | 11月7日 | 国際協力プラザ訪問 |
| | 8 | 21日 | イスラーム文化に触れる(日本イスラーム文化センター(大塚モスク)訪問) |
| | 9 | 28日 | 留学生送別会、冬休み課題レポートについて 課題:留学生へのお手紙 |
| | 10 | 12月5日 | 留学生お別れ会(食文化) |

<2学期実践内容>

| | 回 | 月 日 | 実 践 内 容 |
|-------------|----|-------|--|
| 2 学 期 | 1 | 9月5日 | 夏休みレポートブリーフプレゼンテーション、9月8日ガーナ高校生来日交流会準備、MLCの現状報告 協力隊員とのメール交換の進度確認←(冬休みの課題レポート頭出し<メール対策のすすめ>) |
| | | | 9月8日(月) 16:00~19:00 ガーナ高校生来日交流会 |
| | 2 | 12日 | 3ヶ国(日本・ブータン・オーストラリア)のアンケート集計(班別で付箋貼り) |
| | 3 | 19日 | 3ヶ国の比較Ⅱ ・日本とブータンの共通点・相違点についてディスカッション |
| | 4 | 10月3日 | 3ヶ国の比較Ⅲ ・日本とブータンとオーストラリアの共通点・相違点についてディスカッション |
| | 5 | 17日 | 体験してみようⅠ<食文化> ~ブータン・ネパール・ラオス~ |
| | 6 | 31日 | 冬休みレポートの内容について、これまでのメール交換内容について情報交換(班別) テーマの調整&決定とそれに基づく調べ学習(コンピューター使用可) |
| | 7 | 11月7日 | 国際協力プラザ訪問 |
| | 8 | 21日 | VIDEO<宗教> |
| | 9 | 28日 | イスラーム文化に触れる(日本イスラーム文化センター(大塚モスク)訪問) |
| | 10 | 12月5日 | 大塚モスクの感想、留学生送別会<食文化>について、冬休みレポートについて |

* [] は、授業計画を変更した箇所である。

○ガーナ高校生来日交流会に参加して

平成15年9月8日（月）、JICA国際協力事業団（現国際協力機構）の依頼を受け、「異文化理解」及び「国際理解とジェンダー」を履修している2年生希望生徒が、招聘事業の一環で来日したガーナ高校生との交流会に参加した。日頃から、頭の中では『異文化を理解したい！』と強く願っている生徒たちであったが、今回のように20名を越えるガーナの男子高校生たちの英語や部族語を耳にし、アフリカの食事をとるといったあまりにも非日常的な環境では、さすがにカルチャーショックを隠せなかったようだ。本当に異文化を理解することがいかに難しいかということを全身で感じ取ることができた貴重な経験であった。（資料2参照）

○（宗）日本イスラーム文化センター（大塚モスク）の訪問について

当初の予定では、ラマダン最中の11月21日（金）に日本イスラーム文化センター（大塚モスク）を訪問し、イスラム教についての話を聞いた後、イフタール（日没後にとる食事）に参加させて頂くことになっていた。数名の生徒は、ラマダンの雰囲気を少しでも味わうため、朝から食事を摂らないでこの訪問に臨んだ。しかし、当日朝、対応して下さる方がいないという連絡が入り、訪問は11月28日（金）に延期された。訪問した日はラマダン明けだったので、話を聞くに留まり、イフタールへの参加の機会には恵まれなかった。

この訪問は、生徒たちにとってやや唐突過ぎた感があり、今年度の反省点の一つである。異文化理解の授業では、頭だけではなく、体験することで理解を深めることを重視している。イスラム教についても、イスラム教徒がラマダン期をどのような思いで迎えているのか、またどのような行為が行われるのかなどといったことを、実際にモスクを訪問し、イスラム教徒の方々から直接見聞きして理解を深めようと考えたのである。授業で訪問しない限り、個人的にモスクを訪問する機会はほとんどないため、良い機会であると考えていたが、結果的には、一昨年前の訪問で得られたような大きな収穫は得られなかつた。理由は、お祈りの時間が途中で入ったこと、入信したばかりの日本人青年の入信に至った経緯の話が長かったこと、イフタールに参加できなかつたことなどがある。生徒たちも、十分に事前学習をしないまま訪問をしたことに対して、不満な思いが残ったようである。体験重視型の授業とはいえ、次回訪問をする際は、もう少し生徒たちに事前学習をさせてから臨まなければ、学習効果は上がらないと感じた。（資料3参照）

<3学期授業計画および実践内容>

| | 回 | 月 日 | 授業計画および実践内容 |
|-------------|---|------|--|
| 3 学 期 | 1 | 1月9日 | 「留学生お別れパーティー」鍋料理（ちゃんこ・きりたんぽ鍋・しゃぶしゃぶ）&おしるこ |
| | 2 | 16日 | レポート発表について説明、グループで発表内容の調整、発表内容の骨子について各自まとめる |
| | 3 | 23日 | レポート発表Ⅰ<タンザニア> |
| | 4 | 30日 | レポート発表Ⅰ<ミクロネシア；ヤップ島> |
| | 5 | 2月6日 | レポート発表Ⅰ<ラオス>任国事情1分×グループ全員+（発表5分+質疑応答3分）×グループ全員 |
| | 6 | 20日 | レポート発表からわかったこと、気づいたことなどについてディスカッション |
| | 7 | 27日 | 卒業生 お話「あしなが育英会&ウガンダ共和国のエイズ問題に携わって」 |
| | 8 | 3月5日 | 1年間の授業を振り返って |

※3学期については、授業計画と実践内容に変更はなかった。

○レポート発表について

1学期後半から、関西大学総合情報学部のMTGプロジェクトの一環で、現在活躍中の青年海外協力隊員とメール交換を行った。このメール交換では、本やテレビなどからでは得られない「生の声（情報）」を収集することができた。そのため、日本と途上国の生活環境に大きな違いがあるということを、生徒たちはより現実的に受けとめることができた。また、隊員のいる3ヶ国を比較することで、途上国と言っても国が違えば、同じ国と言っても地域が違えば、生活環境や生活習慣なども大きく異なるということを実感することもできた。さらに、日本との共通点を見出すこともでき、今まで関心のなかった国々がより身近に感じられるようになった。

生徒たちは、本などで調べた内容について、隊員に直接メールで確認をしたり、疑問に感じたことを尋ねたりしながら学習を進めたが、任国の通信事情や隊員個人の違いにより、メール交換が頻繁に行われたグループもあれば、ほとんど音信不通となってしまったグループもあり、グループによって進度に差が出てしまった。この点では反省が残るが、日本の生活環境では予測し難い事態が、途上国では当然のように起こり得るということを体験的に学習できたことは、異文化理解を学ぶ生徒たちにとって大変有効であったと考えている。（資料4参照）

3. 一年間の授業を終えて

今年度は、意見や感想を活発に述べる生徒が多かった。きっかけは、授業内容を変更して行った青年海外協力隊OG講演後のディスカッションである。生徒同士で意見をキャッチボールする雰囲気が授業の中に出てきて、生徒たちは物事を多面的に見るようになった。体験後の意見や感想を仲間と共有する時間を確保することは、より深い理解につながるということを改めて感じた。（資料5参照）

組一一番 氏
——
感想及びわかったこと、気付いたこと、自分もやつてみたいと思ったことなどを書いてください。

一言で言って、本当にシラップを飲みました。世間で盛んに募集して、飲料半額にヨリで載っている青年海外協力隊の実態を知った気がしました。

話を聞いてうなづく。確かに青年海外協力隊は原因だと思いまして。なぜなら消費的な活動では、アラビアに派遣できないなんて当たり前の事だとは思ってないからである。

「でも、家に帰った母は、この衝撃的だった話をどう言つたかを、ひいて3つに分けてお話し下さい」と聞かれていた。といつても、不真面目な学生が多い中で、二人は、高校時代から積極的に奨励助にはつて老夫婦である。

大学時代には日本の活動をアラビアへ人が、自ら家に進んで引きこもる消極的なところを望みはないと思っていました。こんくて人の問題といつても、青年海外協力隊のシステムには問題があるのではないかと思いつた。若い人が、帰国後何の保證も手当でもないのに進んで、たゞ日本にいる人達が、能力を充分に發揮できないような場には決して入れなくていい。なぜか、こども何年も続けて3という改善の力がないから、もう派遣こもろくオオといつても、システムが可能していた現状が、浮かび上がつてきました。

また、援助金を貰つて、これが得たもの同様、自分の中に必ず矛盾を見つけることであつたという話をも印象的でした。私は平年率、1971年から約15年、援助金に困りたいと思つてしまつたが、これは衛生館でした。生活水準が低い人を助けるために、他の人に進む馬鹿にふるううちに自分の尊の姿と融合しながら、自分が中立者となつてしまつたのです。そこで、こども平 당시に感じたことを思いました。ひとつ同じ時に、自分の将来はいいかも。本当に援助活動と一緒に関わるのか不安になりました。

とにかく、私がそれをどこで教えるか、何で教えていたか? そして、青年海外協力隊が日本でやめて、日本へと戻りました。セヨン、おひだり日本への日本が、で、7月27日の授業について

△みんなの意見感想を開いて見てたこと。
△みんな、青年海外協力隊が日本でやめさせられ全くなっちゃってしまったで、それをどうで思つてました。セヨン、おひだり日本へと戻解して、で、7月27日のこと。実は美化された状態でしか理解していなかったので、それがいかと思つてます。

とにかくカッコイイ・ショックと、うれしいで、びっくりした、という言葉しか見つけられない。まずは会場に入つて何かい合った時の印象は、服装や髪型、つけていたものなどは日本の高校生とあまり変わらない、といふことだ。（單に日本で買った服を着ていただけかもしれない）。（單にアフリカの民族衣装のようないくつかの服を想像していたので、意外だった）。（單に一番最初にびっくりするのは、開会の挨拶が終わってすぐに囲まれて写真撮影が始まったことだ。何も予期してなかつたので、いきなりそれがなにかが走って突然としました）。（そばで一緒に写真を撮るために左側も右側も目を丸くしていく）。（でも今から思えば、良いきっかけだ）（にかもしない）。（最初から最後にフレンドリー（？）に接してくれたからこそ、どちらも打ち解けられたし、言葉に言語ができたからだ）。それからからはガーナ料理についていろいろ話が聞けたのでよかったです。ガーナ料理を食べたり感想は、日本のお洋風レストランなどで食べることある味だった。ガーナ料理を食べたかったのですが、私の家では、日本の人にはまだない、改めて思い、とても新鮮だった。

トマトとタマネギとチキンを使ったスープは、私の家でもでききり出るメニューだったので、ガーナの定番料理と似ていて、しかも、カレー風味のピラフも、（エリア）のちゃんとしたので、おいしく食べれたが、たまたま苦手だったのはフード（？）というキッシュが、作り手に主食の料理だ。日本のお米のように他の料理をおかずにして食べるものらしいが、古がわりと味がべないところが、あまり好きになれなかった。ガーナ人はこれを毎日食べると云う。ガーナの料理を食べたかったが、多くの機会はないので、いい経験になった。そして一番印象に残ったのは、日本では、ひっくり返したのは何よりもガーナ人の押しの強さとスキニップの多さだろ？！。初対面なのにこんなのがアリなんだろ？！と思つた。日本では絶対ありえない。私達は公式な場（会談とか？）でしか滅多に握手はしないけれど、ガーナの人達にとって握手は軽い挨拶くらいの感覚なんだなあ…と思った。だから私達が明かへに戸惑つていつのを見て、向こうは（何でそんなに嫌がるんでしょう…。）ともしかばねだら、思った。

他に気がついたことは、話をする時の距離感が近いということだ。日本人は話をする時にわりと相手と距離感をどう方で保つべきか悩んだ。前にスハイン人にについての本を読んだ時に、スハイン人は自分の考え方や書いていたことを相手にきちんと伝えたいし、いつも気持ちから頭を近づけて話す、ということが書いてあたのを、思い出しながらもそれは近いのか、と思った。でも自分の言いたいことを伝へなければなく、ガーナ人の場合には相手の話をしっかり聞くとしているのが感じられた。日本人は耳がって目を合わせないよりも部分があるけれど、ガーナ人の方が、あるいは、そういう風にされると落ち着かない部分が大きい。だからしたら話を真剣に聞いていないよかに見えるのは仕事ではない。そういうことを考ふると、コミュニケーションの差しさどは單に言葉だけの問題ではないんだが」と改めて感じた。普段は日本人の「奥ゆかしさ」とか「わいざ」といふ価値観を意識したことばかりが、今回がナイスとの交流の中で自分日本人らしくない」と改めて思ふ、今まで新鮮だった。

今までの授業では、海外で生活している人のお話を直接聞く機会はあります。留学生以外では（これが外国人と会って直接話したりする機会は（留学生以外ではこれが初めてだったのです）、まずは「異文化理解」の難しさを感じた。留学生が理解するには簡単や習慣のことで生活している人々にとってそれは本当に複雑で難しいことに感じた。現に私は今回あまりの違いに大きなショックを受けたし、少し弱い部分もあったし、理解できれないこともたくさんありました。でも理解するためには必ずやりて知ることが大切だし、その後疑問をすきたりいろいろ考えることが必要だと思ふ。それから除々に理解ができるところになつていくのだらう。だから今回のこの経験は私にとってとても貴重なものになりましたし、良い思い出だ。（次に振り返ってみるところ結構驚きの連続で楽しかった）これからもこのような普段接することができない人々と接する機会があればいいが、と思っている。

<資料3>

2. 11/28 金の大塚モスク訪問で、イスラーム文化やイスラム教について新たに知り得たこと、またはさらに疑問に思ったこと、感想など

私はお話を聞くまでイスラム教に対して偏見を持っていました。何からくる偏見なのかは自分がよく分からぬけれど、なんとか自分たちとはかけ離れたもののように思えておりませんでした。けれど話を聞いてみたら、偶像崇拜をしてはいけないなどの理由がわかった気がします。他の宗教に比べてイスラム教が一番神との結び付きが強いと思いました。印象に残ったことは、「目的は永遠の来生」ということと、「原理主義はない!!」ということです。「目的は永遠の来生」というのにはどうも共感できないと思いました。やはり大切なのは今だと思います。「原理主義はない」というのは信じられる方、られない方などという印象を受けました。日本のメディアが視聴者を引き付けるための用語なのかもしれないと思う反面、やはり口を合っていることは「他の宗教も認めてる」と言っていたことと錯覚したからです。イスラム教は前よりかは知識を得て身边な存在にはなったと思うけれど、やはり理解がほしいこと、つまり宗教は奥が深すぎるため話を聞いていただけではやはりつかなかった。

2. 11/28 金の大塚モスク訪問で、イスラーム文化やイスラム教について新たに知り得たこと、またはさらに疑問に思ったこと、感想など

初めて実際にイスラム教徒の人から直接話を聞いて、教科書で「(は)わからなかつた様なことを発見しました。
今生でいた、「イスラム教」、いうものはすごい厳格で、規律ばかりの生活だなと思っていました。でも実際は未だ詳にはじたが、いろいろしてみるとほど私達の生活とかけはづれたり生活を送、というわけではないといふことがわかりました。
またイスラム教をよく叩いてるからといって他の宗教を嫌ってたりするのではなくて、今まで誤解していたことがたくさんあるということに気が付きました。
今回のモスク訪問で、イスラム教のこと未だ全く学べたのと同じで、教科書を読んだり習ったりしまい3つとて実際にその人の人ふれる事で、全然これまでがちがうということに気が付く事ができました。

2-() NO. () 氏名()

- * 私自身のデータ記述が他の人にわかりやすく、どの人の話を聞いていても、何を基準に「医療・保健分野」における援助」という、どうかが難解がいいものにしてしまって、「これはまい、今回のレポートで、どの国について調べた上での段階ですべきものだったような気がします。本を読んで、得た統計データから導き出された「日本の人の生活度」を、他の人の発表で
- * 全体について

● 私自身のデータ記述が他の人にわかりやすく、どの人の話を聞いていても、「医療・保健分野」における援助」を理解する上でも、何を基準に「医療・保健分野」と思ったときは、人々が「普段食べている」と思っていることを知るかが一番の近道なんだなーかなーと思いました。他に参考されたのは、伝統的な民謡や習慣、制度については「いい感じ」だったり、同じ国の人たちが「何を大切にしているのか」が少し見えてるような気がしてました。

今回ふと思ったことがあります。異文化を理解する上で「私たちたちがこなした事がある」と調べるといふことは、逆に「私たちたちが日本の人たちに日本を紹介するときに、こうした事を説明すれば」、とか人間の日本への理解を深めてもうかるといふのが「はない」(?)か、「そういうことですか？」などと異文化コミュニケーションによってつながり、相手を理解するだけではなく、自然に日本は異文化コミュニケーションによってつながります。(このままで人間や文化や伝統を過ての意味では、「いい感じ」にならぬと思います)。

● 私自身のことを理解しておることも大切なので、「ほないた」うん、と思いました。

これが全く、多前いかがながらはがたに国について、その暮らしそうやいふれ、環境の様子を知ることで、「いい」はっきりとしたイメージを持つてはじめて「ほないた」。すと、その国について詳しく、どうなじこひのかへたりたいとう気持ちが湧いてきてしまいました。

日本。アジアの国々。世界の国々。興味と関心の赴くままに、もっと知りたいと思います。

△資料4 △

2-() NO. () 氏名()

* 発表を聞いてわかったこと・感じたことなど
* 今まで自分の調べた部分いかからかたので、同じ国の違う人の発表を聞いて、わかったことがたくさんありました。果然知らない国のことを見くわ、少し自分で調べた国が新たな面を発見する方が、逆にもしかったです。上の面から見て時は「なんだ?」と疑問に思つたことも、様々な面から見ることで「なるほど!」と納得できました。自分がいろんな国の感想を書いて気付いたんですけど、やっぱり自分の感想は何だか偏ってるなあと思いました。ヨロネシアについては「カースト」、タンザニアについては「マサイの食事(血を食す)」、という一気に疑惑に反応しました。もつて違う所にも異文化を感じる部分はあったはずなのに、なぜか強く興味を魅かれた気がします。それに、「カースト」や「マサイの食事」については多少の知識を持ち合わせていたので、異常なほど先入観がありました。「カーストはなんてひどいものなんだ」「血を食べるなんて信じられない」と思っていました。でも実際は、ヨロネシアでイドのカースト制は全く言つていはずと違っていました。前回の授業で考えてみたら、自分達も血を全く食べないわけじゃないということに気付きました。(生肉で食べてますし…)

● サイ族については、「彼らという民族がついていまし、なんが野性的な感じじたから、自分では分けた考えていたのかもしません。

自分が調べたラオスについては、もう少し調べてみたいなと思いました。

● 4月の自分と今の自分はどう変わったか?

私は始め、アメリカやヨーロッパの国々のようないかゆる「大國の文化」を知りたいと思ってこの授業を選んだ。だから最初の方には、自分のやりたいことと違うかな…少し思ったこともあっただけれど、今から考えると、そういういたずらは、この授業をどちらかから絶対自分ではできなかっただし、知ることができないことだと思つ。例えば、「人のお話を聞く」、「モスクに行つたり」、「ガーナ人の交流会に行つたり」という自分の思いこれが「変わった」。私は「国際的なボランティアにつけて何かやってみたい」と思つた時に、「これが本当にいいことで、たぶんこれがしたいんだ!」と確信していたけれど、こんな話を聞いた後には、何が本当の援助で、何が本当に一番いいのか、というのを見聞に感じ、援助やボランティアの難しさを実感した。ガーナの交流会も、この授業を受けていたから、たら行なうとは思わなかつたけれど。でも実際に、一番印象に残つたのが「この交流会で」「異文化理解」はメジでいるほど簡単なことではないか、た。また、普段「自分が日本人だ」という意識はないけれど、ガーナの人と言話した時にそれをすごく実感した。まとめると、4月の私は「異文化理解」というものを強く実感することにふって誰でもできようかほものに感じていたり、ボランティアの華やかな面ばかり見ていた気がするけれど、今はもっと全ては複雑でいろいろな面がある、ということをかみしだしてかわいた気がする。また、今まで自分が興味のなかった国（アジアやアフリカなど）について

● 一年間、異文化理解IIの授業に参加して、感じたこと、考えたこと

左側にも書いていたが、「理解する」ということはイメージよりもむしろ難しいといつてた。世界にはさまざまな国や文化があるけれど、その一つにはそれが歴史がある、その中で暮らす人々やその環境、特徴などはどうだにせよ、事実を知るだけでは当然、知らないものだと思つた。でもだからといって「知らない」という意味がないわけではなくて、「知らないことがあって初めて「理解する」があるのだろ」。「知らないことをやめてあつた」が「理解すること」ではない。だから、これからはこの授業で「教科書や分野を参考にして、さかねて、いろいろチェックアップして情報収集や分野を参考にして、さかねて、いろいろな文化について興味を持ったものを調べたり、さらにその国に行つたりしてみたいと思っている。まずは同じアジアにある国から見ていきたい。最後に、この前の授業で先生がおしゃついていた「外国的文化だけが異文化ではない」という言葉が印象に残つた。日本にいても異文化化される機会はいくつもいるのだから、と思った。自分と全然違う考え方を持つ人に会うことにはこれからもたくさんあると思つけれど、かくいふ人にはユダヤ!と決めつけたりするのもではなく、その人のいろんな面を見るのがいいだ。

● 授業の中でもっと取り上げて欲しかったこと、やつてみたかったことなどガーナの交流会のよくな交流会にもっと行きたいよか、T-1など思つた。（やつぱり）実際 外国人と会って考え方などは多いと思つた。

*提出 3月12日(金)までに土方机上

● 4月の自分と今の自分はどう変わったか？

もんいろいろなところに目を向けようと思いました。今まで、外国といえば興味のある国は、アメリカヨーロッパなど、有名どころばかりでした。だから外国＝アフリカ・ヨーロッペという季子が通じる中であって、異文化の授業などもさうのことをやるんだろうなあと勝手に思っていました。でも、授業では全くといっていいほどそういう国のことではなく、ラオス・タンザニア・ミクロネシアなど、今まで聞いたことのないような国のことについて調べたり、意見交換したり…。最初は正直言って、「もっとメジャーな国やアーヴィング中で思っていました。でも、深調がれば言葉が限界はさて、その国についての知識がゼロだら、いろんな問題で驚かされたり、深さをせせられたりして、自然との繋がりがほんとうに気になります。今まで外国＝アメリカ・ヨーロッパだと考えていた自分がなんかバババしく思つたくなりました。それに先輩や元青年海外協力隊の方の話を聞いていて、やっぱり実際に行って、この目で見て、その国のいいとかも肌で感じてみたいと思つるようになりました。いつもよくこんな調べたり、聞いたりして「百聞は一見にいが」ですが！先輩が言つて、「こんな世界が本当にあつたんだ」。ひう言葉が本当に心に残ります。この言葉は「ぶんぶん一生忘れられないと思います。今まで、どこ自分で違う世界ながら…スピーチを見て感想の欄に書いたりの言葉を並べてた自分で、お別れができた気がするし、これからいろいろな世界へ目を向け、一つの物事でも違った面からいろんな見方ができましたから、本当にこの授業とっても良かったから思ふと思います。

授業の中でもっと取り上げて欲しかったこと、やつてみたかったことなど

今まで、どこ自分で違う世界ながら…スピーチを見て感想の欄に書いたりの言葉を並べてた自分で、お別れができた気がするし、これからいろいろな世界へ目を向け、一つの物事でも違った面からいろんな見方ができましたから、本当にこの授業にとって良かったから思ふと思います。

● 一年間、異文化理解IIの授業に参加して、感じたこと、考えたこと

実際に国外で活動してほと人の言葉がたくさん聞けて本当に良かったと思います。先生も、先生も理解難易度がちがう、授業の雰囲気がアットホームを感じたので、私は異文化の授業が結構好きでした。確かにレポートと書くのは本当に大変でしたし、正直まだなまじと思っていたり、そういう経験は自分の目にあって感じることができたら、今思って良かったと思います。それに先生もおしゃっていましたが、みんなが結構意見と積極的に出してくるので、「あら、こう考らぬとも思ひません」で納得させたり、「二話以上で違う立場の意見に対してどのようにお答えされます。私はお話ししたり、私ができないうでない意見と言ふところが好きなので、そういう雰囲気が大好きでした。

本当に多い時はありますけど、それでたのめることを教えてもらいました。

本当にありがとうございました。

授業の中でもっと取り上げて欲しかったこと、やつてみたかったことなどです。また、その時の世界情勢についてもお話し合いました。